



Title	ロレンスの影のもとに : イタリア派アメリカ文学研究覚え書
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外国語大学学報. 1961, 10, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロレンスの影のもとに

——イタリア派アメリカ文学研究覚え書——

大 井 浩 二

Notes on the Italian Studies of American Literature

Koji Oi

S U M M A R Y

In this essay, I have introduced Emilio Cecchi's *America Amara* and Luigi Berti's *Storia della Letteratura Americana*, and have tried to show that these Italian works on American life and letters were produced under the aegis of D. H. Lawrence and his *Studies in Classic American Literature*, whose influence and significance have been increasing in the United States.

しばらくまえ、佐伯彰一氏は「ロレンスとアメリカ文学」と題するエッセイの中で、きわめて率直に、D. H. ロレンスの『古典アメリカ文学研究』（1923年）が氏のアメリカ文学への開眼において果たした役割について語っていた。「二十才の無学な青年がおぼえた感動」と、そのかつての「興奮」への「気恥かしさ」とを巧みに語っていたのであるが、勿論、そのような個人的な感慨にのみふけていたわけではない。

「すでに三十年近く以前に書かれ、しかもいかにもロレンスくさい——あまりにもロレンスの書物」のもっている一般的な意義についての鋭い考察も決して忘れていないのだ。

ぼくらがこの本の中でいきなり直面させられるのは、たんにロレンスの魂というより、アメリカ作家の創造力の源そのものだ——そんな感じを禁じ得ない。対象と論じ手との間に、いきなり圧倒的な共鳴音がひびきわたり、ぼくらはロレンスの強引な説得力の中にひきずりこまれるというよりは、アメリカ文学のまじり気のない裸のリズムに魅せられ、運び去られてしまうのだ。

というのが、佐伯氏のこの書物に見出した一種の「活力」であるといってもよい。

ここで僕がこのようなことを書きはじめたのは、一つには、『古典アメリカ文学研究』に再評価の光が与えられようとしている事実に興味があったからに他ならぬ。たしかに、これまでの僕

らの常識では、このロレンスの書物は恐るべき独断と偏見とにみちあふれた本であり、異端の書として排斥されかねない有様であった。あるいは、ひそかにその意義をみとめつつも、公言をばかる人もあったにちがいない。佐伯氏の文章は、いわば「声なき声」を代表するものであり、ロレンスの書物に一つの新しい意味を附加したものであると考えられる。分析とシンボル狩りなどに疲れ果てたアメリカ文学研究の現状に、一種の活性剤を注入し、常に「崖っぷち」まで行きつこうとする方法の重要性を僕らに示しているものといえる。この点については、あとでもう一度ふれることになるであろう。

このこと以上に僕に興味深く思はれたのは、佐伯氏個人のいわばアメリカ文学開眼に役立ったロレンスの書物が、イタリアにおけるアメリカ文学研究において極めて重大な指導的位置を占めているという事実を思い出していたからだ。このイタリアでのアメリカ文学研究方法を考える場合、僕らは絶対にロレンスの書物の影響を無視することはできないのだ。アメリカの批評家 L. フィードラーは、ロレンスがイタリア人にとってヴァージルの存在であることを指摘し、「イタリアにおいては、アメリカの大学においていまだにかえり見られることのない、声高の自己満足的な見識にあふれた『古典アメリカ文学研究』に寄りかからないアメリカ文学関係の書物を読んだり、講義を聞いたりすることは不可能である」と記しているほどである。「イタリア人にとって、ロレンスの書物は（パイプを口にくわえた教授先生にはあまりにもコミットしすぎて、つつしみがなく、不安をかもすものではあろうが）、ロレンスがイタリア人の側の *simpatico*（同調者）であることを示す証文である。従って、イタリア人の古典アメリカ文学、彼らのメルヴィルやホーソンやクーパーは、今日にいたるまで、本質的にはロレンスのそれである」とフィードラーは書いている。

ロレンスとイタリア派アメリカ文学——きわめて魅力ある論題であるのだが、いまの僕にはこれを詳細に追求する能力も余裕もない。ここではきわめて臨時的にこの問題を考察することにして、いずれは僕などよりもずっと多力な紹介者・研究者の現われることを期待しようと思う。

イタリアにおけるアメリカ文学研究を考える場合、僕らが決して見逃すことのできない書物はエミリオ・チエツキの『にがいアメリカ』である。このいささかショッキングな題名をもつ書物は実はアメリカ旅行記であり、正確にいうと、その三分の二が合衆国に関するもので、あとの三分の一はメキシコを取扱っている。著者チエツキが序文の中で記しているように、1930—31年及び37年—38年の二回に及ぶアメリカとメキシコ旅行の印象をまとめたもので、「特に合衆国に関しては、政治的文化的な点についてよりはっきりした考察」を加えたと書いている。

たしかに「にがい」(amara) と「アメリカ」(America) との結合は強烈な効果をもってい

る。America Amara——言葉の調子もいい。著者はこの題名が「あらゆる意味で正確」なものであると書いている。いいかえれば、チェッキのいだいたアメリカン・イメージは「にがい」ものであり、物質文明の繁栄の裏にある暗い陰気なアメリカの姿を提起しようとしたのだ。この書物の出版されたのが1930年代の末であることを思えば、その政治的意図について考慮すべきかも知れない。が、ここでは、その点をいっさい切りすてて、『にがいアメリカ』がイタリアのアメリカ文学研究において果たした役割に焦点をしばり、ロレンスの見解をイタリアに定着させた働きだけを考えようと思う。この書物が「アメリカという国を一つの地理的社会的存在からイタリアの想像力の事実へと変貌させた書物」であり「伝説的な旅行記」であるというフィードラーの言葉を思い浮べれば、その影響力のほども十分に察しがつこうというものである。

さて、この『にがいアメリカ』がロレンスの影響を受けていることは明白であり、ロレンスからの引用さえも見受けられる。アメリカの現代文学を語った際、チェッキは、アメリカ文学のある作品は「『オエディプス』や『メディア』よりもずっと恐ろしいものだ。それと比較すると、『ハムレット』も『マクベス』も『リア王』もただのまやかしにすぎない」というロレンスの言葉を引用している。フィードラーの伝えるところでは、このロレンスの言葉をチェッキがそのまま『アメリカーナ』というイタリアで出版されたアメリカ散文集の序文にも引用しているのであるから、彼がこの文句を相当に高く評価しているとみることもできよう。少なくとも、これによって、アメリカ文学に対するチェッキの姿勢がおぼろげながらも理解できると考えていいだろう。チェッキの頭の中には、常にロレンスのアメリカ文学論が用意されており、彼チェッキの結論はロレンスの見解の修正発展であり、あるいは否定であると極言することも不可能ではない。

従って、ある場合にはロレンスと異った意見が聞かれないこともない。たとえば、上に述べたように、ロレンスがアメリカ文学のあるものは『ハムレット』や『リア王』などよりもはるかにすぐれているというとき、おそらく彼はアメリカ文学に「古典」の高みを、高度の悲劇性を附与していると考えてよい。が、チェッキは必らずしもそうは考えない。途中の説明をぬきにして結論のみ記すと、アメリカ社会にあるのは「希望のない幻滅」ばかりであって、そこには「異教主義」が支配している。これは物質文明の繁栄や宗教性の欠如などによってひき起された一種の無秩序状態、ヴァイオレンスの世界を意味する。このような混乱した社会にあっては、作家はヒステリックにならざるを得ず、アメリカにおける作家と大衆とのやりとりは「オフェリアの墓の上でのハムレットとレアティーズ」との間のそれに類するもので、おたがい声高に悪態をつきあうばかりなのだ。いってしまえば、現代アメリカ文学は「陰気な競馬」であり、この競馬に登場するウマは実はトラであって、騎手はおりるとそのトラに食われ、またいつまでも背にしがみついているならば、トラは騎手を地獄の果てまでもつれ去るであろう、というのがチェッキの結論で

ある。更にいえば、フォークナーやヘミングウェイなどのいわゆる「危機の文学」の作家たちは、アメリカ文明の混乱、チェッキのいわゆる「異教主義」を写すものであって、風俗小説家としての存在価値しかないということにもなりかねない。

さきほど僕はチェッキがロレンスを出発点としながら、結論においては異なるようだと書いた。がしかし、考え直してみると、ロレンスが『古典アメリカ文学研究』の序文の中で、極限にまで行きつめた近代人の意識に到達していたのはロシアとアメリカであると断言したとき、彼の意味していたアメリカ、ポオやメルヴィルやホーソンやホイットマンのアメリカであったはずだ。とすれば、1930年代のアメリカ文学についてロレンスが発言したと仮定した場合、あるいはチェッキと同じ見解に達するかも知れず、チェッキの判定をロレンスと異質であるとする積極的な理由はなくなってくる。

批評家 R. チュースは、ロレンスの仕事がアメリカ文学の欠点をえぐり出し、これを是正しようとするのであったと指摘している。ロレンスの「崖っぷち」まで行こうとする態度は賞賛に価するとしても、

しかし、ロレンスはアメリカ小説は病んでいると考え、それを癒やすことを欲した。たしかに、アメリカ小説には欠点があり、病んでいるだろう。しかし、その欠点にあまりにもこだわると、よきにつけ悪しきにつけ、アメリカ小説の真の姿を見失うことになるであろう。というのがロレンス批判であった。この言葉はある意味で「にがいアメリカ」のイメージを示そうとするチェッキにも通用するものだ。彼もまたアメリカの「にがさ」を強調するあまり、その「異教主義」にこだわりすぎ、その結果、現代アメリカ文学を「17世紀風な恐怖のバロック趣味」の表現としか受け取ることができなかったのだと考えられる、と僕は思う。皮肉ぬきにいって、ロレンスとチェッキとはその態度の性急さに共通性があるともいえるだろう。ともあれ、僕としては、この両者の相異点を強調するよりも、前者の後者に対する影の深さについて考えるべきであろう。

そのために非常に好都合な一文が『にがいアメリカ』の中にある。それは「ある先駆者」(Un Precursore) と題してメルヴィル、特にその『ピエール』を論じたものである。この文章を紹介するまえに、一つのエピソードを記しておこう。『古典アメリカ文学研究』のメルヴィル論が佐伯氏に大きな衝撃を与えたことはすでに述べたが、1930年、チェッキがカリフォルニア大学でメルヴィル再発見の必要を説得するために、このロレンスの書物から引用したところ、その本は「非学問的だ」と攻撃されたというのである。当時のアメリカ学会のロレンスに対する冷淡さを示す一例としても面白いが、同時にまたチェッキとロレンスとの近親性を物語るものと言えよう。

「ある先駆者」と題する一文を、チェッキは「書物、真に書物と呼ばれるに価する書物は、人

間や文明に関する重要なドキュメント」であると書きはじめ、そのようなドキュメントのリストの第一位にくるのが、他ならぬハーマン・メルヴィルの『ピエール』であると断言している。この本はアメリカの読者に読まれているとはいうものの、果してどのように理解されているのだろうか。それは丁度、「荒れ狂う暴風雨のために海底に没し、まったく人々の記憶から消え去っていた難破船が、貝ガラや海藻をまといつかせ、判別し難いほどに変貌して、再び海面に浮びあがってくるようなもの」であり、『ピエール』も「時間という川の岸辺にたどりついたのであるが、そこにはやっとのことで『白鯨』や『タイピー』、『オムー』が上陸していたのであった」とチエッキは書いている。

この著者の意見に従うと、『ピエール』以外の上記の書物が復活したのは、それらが冒険という材料で構成されていたからで、そのためにこれらの書物には「ありきたりの読み」があったからである。ところが、この「ありきたり」の読書法は『ピエール』の龐大な頁のまゝでは手も足も出ないのだ。読者は目をこするばかりであるか、あるいは冗談と思いこんで笑いはじめるのが関の山である。

とにかく、長年にわたって『ピエール』が忘却の淵に沈んでいたことに疑いはない。1852年の出版のあと、1922年にやっとロンドンで再版され、1929年と30年にニュー・ヨークで「あれこれの理由で忘れられてはいるが、アメリカの文化や習慣の発達に関する重要な書物」を集めた叢書に収められたのである。メルヴィル学者 L. マンフォードによれば、1891年にメルヴィルが死んだとき、信頼すべき文芸雑誌『クリティック』は、メルヴィルの何者たるかをさえ知らなかったという。

イタリア人チエッキの考えるところでは、メルヴィルは『白鯨』の不成功に対するリアクションとして『ピエール』を書いたのであり、彼が『白鯨』を30才の若さで書いたこと自体一つの奇蹟といつてもよいのだが、彼はこの「彼の傑作のユニークでかつ巨大な難解さを確実なものにすることを欲した結果、つづけて挑発的な書物を一冊書くことになったといえよう。現代のわれわれでさえやっとなら理解できない『ピエール』が、彼の同時代人にとって狂気じみているように思われた」としても決して不思議ではない。

表面的な見方からすると、『ピエール』はロマンティックなデイリ ユージョンの詩や散文の性質と共通のものを多分に備えている。この要素は、理由はともかく、過度の強調とか粗野とかによって得られたもので、すでに誰れかが述べているように、『ピエール』はアメリカ版『若きウェルテルの悲しみ』とも言えるのだ。もっとも、「泣き声、涙、かきみだした頭髮、大団円の残忍さ、死人の数、これらは実にアメリカ的にふんだんに提供されてはいるのだが」というのが、チエッキの注釈である。

ここで『ピエール』の物語を詳しく語る余裕はない。とにかく、主人公は詩人ピエールであって、彼をめぐる二人の女性の三角関係、と言い切ってしまうと、あの龐大な物語が単純になりすぎてしまうかも知れない。このメロドラマを如何に理解すべきか、というのが、チェッキが自らに課した問題であるのだ。

一般にあって、「ラドクリフに登場する墓場や喜劇の混合ばかりでなく、数多くの真の芸術作品は、荒唐無稽なプロットの上に成立している」と著者チェッキは書いている。手つ取り早い例として、シェークスピアの『シンペリン』を挙げてみよう。この作品のシチュエーションや語りの多様性が笑いをねらったものであることはたしかである。がしかし、それらは結局のところ「羽根のはばたきによって、たえず崇高さに到達しているものであって、いったん地上におり立つとしても、再び天界をとぶために上昇するのだ」ということを、たえず認めざるを得ないとチェッキは記している。

『ピエール』はそうした種類の作品なのであって、玉石混淆の状態にあるのだ。ある特定の美とか詩的な顕現の性質が、その最も高度のものにあっては、内的な不協和や矛盾と切り離すことができないように思はれる、というのは一見逆説のようにみえて、決して逆説ではない、とチェッキは主張する。多くの場合、歴史的な環境とか文学用語の未熟さのために、その美が表現されずに終ることはあったとしても、その逆に、それが表現されたときには、それに成功した詩人の大名譽となるものなのだ。たとえば、シェリーはこの種の詩人であるが、それ以下の詩人である。もつとも、それ以下であるとの判定は容易に下せるものではないけれども——というのが、チェッキの意見である。メルヴィルの『ピエール』は、実に複雑怪奇な書物であるのだ。

『ピエール』を理解するということは、この物語の「事件からは著しく遊離し、かつ不調和なものであるけれども、唯一の真実であるところの内的かつ創造的な想像力を再現すること」に他ならぬ。この作品がメルヴィルのデカダンスの端緒を示すものであることは否定できぬとして、それは驚き、ふるえ、麻痺、汗にみち、その後40年間メルヴィルにとって、一つの苦痛となりつづける底のデカダンスであるのだ。それは彼の機能の漸進的な弱体化であり、自動的でいりズムで進行する性質のものであって、これを「崩壊」(disgregazione)と呼ぶこともできるが、所詮この二つの用語はほぼ同一のものを示すのだと著者は記している。

『タイピー』とか『オムー』とか『ホワイト・ジャケット』の場合には、自然観察の要素や直接かつ具体的な描写の強烈さがはっきりと支配していて、メルヴィルの芸術に一つの明確な限界ないしは境界を与えている。このことをメルヴィル自身が意識していなかったことは断言できる。いわば彼はカバン一つで漫遊の旅をしていたと表現できるのだが、彼のこのカバンには「爆弾が一杯つまっていた」のだ。傑作『白鯨』の完成は決して偶然事ではあり得ない。

この作品、つまり「白い鯨の恐るべき叙事詩」の中でメルヴィルは彼の作家としての生涯においてはじめて、真に貴重な対象物、いや敵対物（un avversario）を発見したといえる。「きわめて荒々しい本来的なエネルギーで、自己を集中し暴露するほどにプロヴォーキングであるという意味で」とチエッキはいう。『白鯨』には多くの議論や主題があり、それらが一つの大きな全体を構成し、インスピレーションにみちている。これはきわめて稀有なもので、「神秘的な起源」をもち「神秘的な存在」なしには生れ得ないといえようというのだ。

この文学的、という以上の意味をもつ象徴的な白鯨との出会いが終ったあと、メルヴィルのポエジーは崩壊しはじめるのだ。通例、デカデンスや退化の中には、麻痺とか他人の模倣とかの傾向が現われるのであるが、『ピエール』の崩壊の中にはこれに類するものは全然ない。「悲哀にみち、悲劇的でさえあるけれども、この作品はあらゆる部分からエネルギーを引き出し得る現象である」とチエッキは書いている。作品全体としてみれば、その力の総量は減少していないのであり、ただその発揮が妨げられ乱されているのだ。燃焼の不十分な箇所もないではない。しかし、それは溶けた金属の表面に、不純物が決して溶けることなく、炭化して純度をおとす結果を招いているようなものなのだ。「構成の不統一やプロットの途法もない馬鹿らしさ」は『ピエール』や『ベニト・セリノ』などの後期の作品には常にみられる。しかし、この表面に浮ぶ不純物の下には、メルヴィルのポエジーが白熱を発してほとぼしっているのだ。

『ピエール』とはこのような物語であるのだ。一世紀ののちに、アメリカ人はこれを再発見し、驚異の念に打たれて読んでいるのだが、彼らはこの作品にある「世間の偽善と弱さに対する若く燃えあがる反逆の攻撃説法」を黙らせることはできないだろう。ここにあるのは、カーライル流に言えば、絶対的価値を求める倫理と、効用と慣習との一般的価値を受け入れる倫理との正面衝突なのだ。

この『ピエール』についてのチエッキの説明はまだ続くのであるが、これ以上語る必要はないと僕には思はれる。勿論、彼の分析には批判されるべき点もあるだろう。しかし、当時ほとんどかえりみられることのなかったメルヴィルの重要性に注目したことは、一つの見識といはねばなるまい。意外に早く、もしかしたらアメリカ本国よりも早く、メルヴィル再評価を行っていたともいえる。この一文を「ある先駆者」と題したチエッキは、いわゆるメルヴィル・ブームの「先駆者」ともいつてよかろう。そして、このメルヴィルへの関心がロレンスの書物によってかき立てられたもの考えるのは、あまりにも僕の身勝手な臆測というものであるだろうか。『にがいアメリカ』の著者チエッキは、わが佐伯彰一氏の大先輩ということができよう。

ここで文学プロパーの問題をはなれて、アメリカ文化一般について考えてみよう。トクヴィルの昔から、外国人は常にアメリカ文化の「矛盾」に注目する。トクヴィルは、アメリカ生活の中

にある数多くの矛盾、現実と理想との分離、思想と経験との遊離、あるいは極瞭に明暗か極端に曖昧かというアメリカ人の両極性、等々について指摘していた。アメリカ生活に内在する諸々の矛盾、などと今更僕が言いたてるまでもなく、アメリカの若い批評家 R. チェースがこの指摘を逆手にとって、「矛盾」こそアメリカ文化の一枚看板であることを強調しているのだ。「矛盾の文化が、そのあるがままの姿を栄光として悪い訳がどこにあるだろう」というのがチェースの主張であった。が、彼はここでもロレンスを引き合いに出すことを忘れてはいないのだ。異端者ロレンスがあの『古典アメリカ文学研究』の中で示そうとしているのは、アメリカ文学の矛盾性、ロレンスのいわゆる「表裏性」(duplicity) に関する彼一流のヴィジョンであったのだ。「アメリカ的想像力の所産にある内的な矛盾を完全に描写する公式」であるのだ。チェースがロレンスと同調するのはこの点であって、後者の「矛盾」解決への指向は全面的に否定しているのであるが、いずれにしても『古典アメリカ文学研究』の著者の根底に、アメリカ文化の「矛盾」の概念を置くことは僕の独断などでは決してない。

『にがいアメリカ』の著者は、「インテリとデイレタント」と題する一文において、アメリカ人の生活態度を探求しているが、上で述べてきた「矛盾」という問題に無縁であるとは思はれない。

チェッキはまず、一次大戦后、アメリカ旅行から帰ったクレマンソーの言葉を引用する。このフランスの政治家はル・アーヴルの波止場で記者団にむかって、アメリカの印象を要約し、「アメリカには一般概念がない。コーヒーが実にまずい」と語っていた。たしかにアメリカのコーヒーのまずき加減については誰れも異論はあるまいし、一般概念 (idee generali) の欠如についても、このフランスの元首相の言葉は正しかろう。ただ、一般概念がアメリカにないというよりは、アメリカ人はこれを真剣に涵養しようとしなないというのが正当であろう、というのがイタリア人チェッキの見解であるのだ。アメリカ人はあらゆるものから「架空の」一般概念をひき出そうとするし、またすべてのものが「権威」のイリュージョンを人々に与えるのだ。すべての事柄にウソを持つという現象は、個人の意志の表はれというよりは、極めて陳腐な経験的なもので、個人を権威の中にツギ木しようとするアメリカ人の願望の発露である、とチェッキはいうのだ。「この見方からすると、アメリカは一時的でグラグラする神学と神話とのモザイクである。神話の酵母がみかけだけは厳密な三段論法の中に醗酵していて、その論法をきわめてグロテスクな結論にねじむけているのだ。」

更にいえば、アメリカは正常な知能の作用をなによりもまず「疑似概念」(pseudiconcetti) のために利用する。この国はきわめてゆたかな「新環境順応」の土地であって、疑似概念のパラダイスといえる。ここから「宗教的なといってもよいほどの尊敬心をもって、思想家や判事や専

門家を崇拜するという拔きがたい傾向」が生じてくるのだ。たとえば、ニュー・ヨークはリバー・サイドの教会には、予言者や聖者のメダリオンにまじって、アインシュタインの肖像が彫りこまれているという有様なのである。

言いかえれば、ある問題について一人の権威者の意見（勿論、全くその問題とは関係のない権威者の）は大いに尊重されるということなのだ。トスカニーニはすぐれた指揮者であるというだけの理由で、新しい天文学上の理論についての見解を求められるし、キャサリン・ヘップバーンの最近作の映画批評をアメリカ人は数学や物理学の教授に求めようとするのである。この傾向はどこかの国の酷状に酷似していると僕には思はれるけれども、この傾向が「われわれラテン人やヨーロッパ人にとっては困惑するほどのコミュニケーションの断絶にむかっている」ことをチェッキは感知しているのだ。アメリカ人の思考と行動とは全く第三者の測り知れないものである。

アメリカにおいて、文士とか大学教授が、その知的関心を常に出版とか教授とかにむけている、と考えるのは大きな間違いである。そう考えるのはヨーロッパ的な物の見方である。たしかに、彼らには知的な興味はある。しかし、「アメリカのインテリたる大学教授は、どの位のエネルギーを教室や書斎にあて、どの位をゴルフや楽しい会話にあてるかを心得ている。正常な生活を、能うる限り無駄なく活用しようと努め、与えられるサラリー以上には仕事をしないように教えてまれているということもできる。」これはいささか皮肉な見方であるけれども、同時にチェッキはこれが「健康な方法」であり、「アングロ・サクソン特有の『慎しみ』の感覚である」ことを指摘している。それは、言いかえれば、潜在的な「知性の臆病さ」であるのだ。

その結、果文化や道德の問題に関するアメリカ人の会話、とくにアカデミックな会話ほどに貧弱で単調で無益なものはないという結果が生じてくる。彼らは常に「まともな」考えを旨としている。その有様は「まるでカラの中に閉じこもっている軟体動物のようだ」とチェッキは書いている。彼らインテリは猜疑心と恐怖心のかたまりのようなもので、それは「古いピュアリタニズムの慎重さと疑惑、それに経済的、政治的な新しい畏が、大学を巧妙なスパイ網でとり囲んでいるため、教師は学部長のお気に召さない意見は、全然持っていないふりをするのだ」ということになる。だから、彼らは自らの平穩無事をかき乱す事態が発生すると、かすかな微笑によって反応を示しはするが、決してその事態を受け入れることはない。この場合、彼らはいつも身近に用意してある一種の精神的な「真空地帯」に逃避する。これこそすべてを透明無色にする偉大なアメリカ的方法であって、物質的、精神的なフーガの術であるのだ。つまり、彼らは「われわれの近づき難い霧の城壁によじ昇り、その背後で呼吸をととのえてから、はじめて身の安全を認識するのである」とチェッキは観察している。

この精神的かつ物質的に安全地帯にあること、これこそ重大な問題で、唯一無二のアメリカ的

理想といい得る。「この安全感の獲得のために、アメリカ人は何千という数知れぬ馬鹿げたサギ的行為で、まともな社会構造のあらゆる層において一致協力しているのだ。」 トマトの新種から新しい靴下止め。宗教史や美術史を賞めあげる雑誌記事。アルコール飲料。声高に鳴るラジオ。すべての人間の手のとどくところにあって、身体的なフーガ（これは精神のフーガの象徴でもあるのだが）をもたらし自動車。スピードやあたりの景色の中に、走ること自体の中に、不安を忘却すること。これらのいずれにおいても「自己や世間との間に矛盾を感じることはない深い霧につつまれた境界線へと突っ走る」のである。すべては「矛盾」からの脱走にむけられているのだ。そして、このフーガの術はすべて、「アメリカにおいては、安全、安泰、独立のイリュージョンをかもし出す方向にむけられ」このイリュージョンはすべて社会的に信頼され推奨されているのだ。いわば、アメリカは小規模な「アナーキストの国」であり、「これらアナーキストは、彼らのアナーキズムが生活のぐくむずかなものに満足し、執拗に事実の証明を拒否する限りにおいて、共存共栄することができる」のである。が、事実を目をむけないというのは、「アメリカが鳥の国」であることを思はせる。「すべてが尻尾をまつすぐ上に出して、やぶの中に頭をつっこんでいるのだ」というのがチェッキの意見である。

更にいえば、アメリカという国は、その当初から、最も巨大な、最も完全な強力性にとむ「訴訟不受理の理由」(fin de non recevoir) であり、「信じる意志」(volonte de credere) の隊商宿であるとチェッキは書いている。つまり、「考えること、態度を変更すること、真実との対決を受け入れること、現実との弁証法的なプロセスに入ること、これらの諸々の厄介なことを避けるために役立つすべてのものを信じる」のがアメリカ人であるということなのだ。従って、ある見方からすれば光りかがやくばかりの「持てる国」アメリカは「度し難い硬化症に、深い麻痺状態にある」ように思はれる。アメリカ人は「事実」を重要視せよと盛んに言う。が、これはまさしく彼らが事実を容易に受け入れようとしないことを、裏から証明しているものなのだ。事実に対して反撥的であり、強硬であるからなのだ。

このアメリカ診断の結末において、チェッキは「結局、アメリカは判断したり理論化したりすることのできない国である」と述べ、その複雑怪奇さに悲鳴をあげた恰好になっている。アメリカとは「現在にも、また何世紀も将来においても、描写され表現されるべき国である。芸術家のための国である。偉大な芸術家、とくに偉大な小説家だけが、本当にこのアメリカを発表し、注釈を加え、それ自体の意識を与えることに成功するだろう。事実、ある程度までこれはなしとげられているのだ。それにしても、福祉と物質的幸福と精神的平穏との理念の上に打ち樹てられた文明に関するすぐれたアメリカ文学が、世界中で最も陰気で最も絶望的で激動的な文学であるのは、実に奇妙なことである」と結んでいる。たしかに、これほどに大きな「矛盾」はあり得ない

といえよう。

チェッキの『にがいアメリカ』についてはまだ語るべきことは多い。しかし、彼の目的がアメリカの「にがさ」を指摘することにあつたことはすでにみた通りであり、その「にがさ」をロレンスのいわゆる「表裏性」へと読みつなぐことも、あながち不可能なことではあるまい。少なくとも、アメリカ文学あるいは文化の「病疾」を指摘しようとする態度には明らかな共通性を認めることができる。僕としては、チェッキの書物をロレンスのアメリカ文学観がイタリアに結実した最初の姿とみたいのである。

勿論、この書物がイタリアのアメリカ文学研究を代表するものではなく、その後『アメリカ文学その他』の C. パヴェツセとか『ヨーロッパの血』の G. ピントール、『アメリカーナ』の編者 E. ヴイットリーニなどに批判されていることも疑えない事実である。が、このチェッキの書物の果たした役割がアメリカ文学ないしは文化に対する重要な「視点」を提供することにあつたという事実もまた否定することはできないのである。チェッキはたしかに一人の「先駆者」であつたのだ。

『にがいアメリカ』の紹介に僕は思はず紙数を費しすぎてしまった。次に、ごく簡単にはあるけれども、最近イタリアで出版されたアメリカ文学史に触れておこうと思う。それは1950年に出版されたルイジ・ベルティの『アメリカ文学史』（現在まで二巻刊行）である。

この著者については、イタリアのすぐれた文学史家であるという以上に、僕には明らかでない。この書物は、チェッキの書物とはちがって正面からアメリカ作家論を展開したものである。現在のところ僕の手許にあるのは、植民地時代からヘンリー・ジェームズまでを取り扱った二巻の大冊で、このあとに第三巻が追加されて完成するものである。「このアメリカ文学史の最初の二巻が出版され、これにつづいて現代作家——W. D. ハウエルズから 強烈な リアリズム、『意識の流れ』、バーンズ（註 J. H. Burns）やロウリー（R. Lowry）やヴィダル（G. Vidal）など——に関する第三巻（索引と書誌付）が出れば、合衆国の作家に関するリサーチや分析の20年以上にわたる労作が完成することになる」と著者ベルティは序文の冒頭に記している。

完成された二巻についていえば、全体は三部に分けられている。第一部は「植民地時代」と題して、「起源」と「革命時代」と更に細分されている。第二部は「ロマンティシズムの動き」と題され、アーヴィング、クーパーなどを扱った「変動の時期」、エマソン、ソーローなどに関する「神話と超越主義の展開」、ポオ、ホーソン、メルヴィルを詳細に論考した最も充実していると思はれる「不安の三巨頭」（以上が第一巻）、ロングフェロー、ホイットリアーなどに関する「上品な伝統」、ホイットマンと E. デイッキンソンをこれまた詳しくたどった「詩の発展」、マーク・

トウエインなどを扱った「西部の覚醒」、その他マイナーな作家を取り扱った「ニュー・イングランド周辺の学者たち」、「冒険の連続」、「国民的表現」、「白人および黒人の地方作家」などに分けられている。第三部は「リアリズムの動き」という総括的な題名のもとに、「ブルジョア文学の勝利」と題してヘンリー・ジェームズがこれまた相当に詳しく論述されている。（これで第二巻が終わっている。）

この『文学史』の圧巻というべきものは、なんといっても、第一巻のポオ、メルヴィル、ホーソンを「不安の三巨頭」（I Triumviri dell'inquietudine）と題して論じている箇所であるだろう。このアメリカ古典作家が、現在再評価ブームの頂点にある問題の作家達であることから、ベルティの着眼点のよさは明らかになる。その上、ハリー・レヴィン教授がやがてこの三人の作家を『暗黒の力』（1958年）の中で論じていることを思い出さねばならぬ。事実、レヴィン教授はその書物の中で、『アメリカ文学史』におけるベルティのこの三作家の取り扱いに言及して、「これら三人は、最近のイタリア人アメリカ文学史家であるルイジ・ベルティによって『不安の三巨頭』という意味深長な形容句のもとに分類されている」と書いているのだ。このことから、ベルティの見識の高さを知ることができると僕は思う。それに「不安の三巨頭」などという文句は、いかにもロレンス好みのものであり、ポオ、ホーソン、メルヴィルのいずれもが『古典アメリカ文学研究』の中に取り扱はれていることから推して、ベルティの書物の中に、ロレンスへの言及が露骨なまでに多いことも納得することができよう。

著者ベルティは、序文の中で、彼の目的がアメリカ合衆国の文学の有機的な評価にあることを指摘し、アメリカ文学はその初期から現代にいたるまで、世界文学の中でも実に豊富な経験を臭えた文学であり、多様な精神の活躍する文学であると述べている。その故に、この文学は種々の困難な問題に取り組んでいる現代世界と密接な関係をもつものであって、現在の時代精神に通ずるものがある。たとえばポオなどが大きく浮びあがってくるのは、そのようなところに理由があるのだ。更に、ベルティは、彼の文学史において、アメリカ文学の発展過程をたどりつつ、「創造的な表現の中にみられるアメリカ文化の特性を追求する」ことに努めたと書き記している。

ここで僕は、『古典アメリカ文学研究』におけるロレンスの目的の一つは、彼の言葉を用いれば、「アメリカ大陸以外のどこにも属することのないあの異質性」の追求であったことを思い出す。「フランスのモダニズムや未来主義がどんな気狂い沙汰をやろうとも、ポオやメルヴィル、ホーソン、ホイットマンの極限的な意識には及びもよらぬ」と断定したロレンスとしては、そのようなアメリカ文学の発生した地盤を検討する必要があるのだ。彼は冒頭の一章を「土地の精神」（The Spirit of the Place）と題して、アメリカ大陸やここへの移住民たちの「異質性」を明らかにしようとした。「異質」な土地に誕生した「異質」な文学、これを忘却の淵から救い出

すのがロレンスの仕事であったといってもよい。

実に驚くべきことに、ベルティもその文学史の最初の章を「土地の精神と初期の植民地」(Lo spirito del luogo e i primi coloni) と題しているのだ。著者はアメリカ文学の世界の入口に立って、そこにある深い神秘性を垣間見ている読者のために、まずこのアメリカという土地の雰囲気伝えようとしている。アメリカ大陸はほとんど人間の住んだことのない荒野であったのであり、その荒野の孤独の中に生まれたアメリカ文学は、結局のところ、「派生した文学」に他ならない。「生れついた根のない人間、すでに形成されている言葉によってのみ知られる用語を使い、すでに形成されている思考形式を用いる人間によってつくられた作品」なのだ。それはヨーロッパ文学の派生として捕える他はないのだ。アメリカ大陸に移住した人々は、アメリカの自然の土壌に全く新しい文化の花を咲かせることはできなかった。「ヨーロッパの古い文化を運んで行き、その文化はひとたび処女地に移植されると、異常な速度で成長をとげ、ここに奇妙な形態が派生するに至る」ということになる。

その上、社会の組織、道徳的な関心、宗教的な背景、その他の要素がアメリカ文学の作品に本来のオリディナリティを発揮させることを妨げる。新しい文学にとって、新しい意識が根をおろすことのできる基盤、それも広大な基盤が必要である、とベルティは言う。つまり、冒険的なヨーロッパの移民とアメリカ大陸の風土との独特の結合が得られ存続することのできる領域が必要であるのだ。そのような基盤ないしは領域はたとえ得られたとしても、常に危険にとり囲まれ、運命の変転はたえまない。アメリカの清教徒たちは荒野の中で絶望と苦悩とに圧迫された。かくして、「ロレンスの所謂『土地の精神』と暗いカルヴィニズムとが広くその黒い影を、いわば人工的な神の恩寵の土地の上におとさざるを得なかった」のである。これがベルティの考えるアメリカの「土地の精神」のあらましであるのだが、ここにもロレンスの『古典アメリカ文学研究』が明らかに言及されるという点から考えても、その影をおとしているというのは、ベルティの関与しないところの僕個人の推測である。

このような調子で、アメリカ作家論が展開されているのであり、このベルティの研究には重要と思はれるものが少くない。が、ここでは特にロレンスと関連のある部分にのみ話を限り、それも足早に通りすぎることにしようと思う。

先に引用した佐伯氏の言葉を借りれば、ロレンスの書物は「破壊的」という形容詞がびったりくるものであり、「古くさい、かびの臭みのする 道学的なアメリカ、粗野な楽天的な実務家たちの国、一切をきっぱり割り切ることを好む合理家たちの天国といったイメージが、ぼくの中でガラガラとくずれ去った」ということになる。このような引用を敢えてしたのは、他でもない、このロレンスの「破壊的」な傾向は、あの「実務家」で「合理家」のフランクリンを論ずる場合な

に、一層効果的であるまいか、と思はれるからである。

ベルティは型通りフランクリンを論じながら、やがてロレンスに言及する。このイタリア人に従えば、『古典アメリカ文学研究』は「権威者の間では悪名高い印象主義の文体」で書かれているが、「詩的な洞察という特異な効果」のある書物ということになっている。その中でロレンスは、少年時代に、父親から例の金言入りの暦を買い与えられたときの感想を記しているのだが、あの異端者ロレンスと合理的な実務家フランクリンとの組合はせは実に奇妙なものに僕には思はれる。ロレンスはこの「太陽と月と星のついた暦」によって一種の刺激を与えられ、それを彼の肉体の中に入りこんだトゲのように感じとっている。と同時に、あわれなりチャードのつぐった「道徳の網の目」からぬけ出し、ということは、他ならぬフランクリンのしつらえた世間的な枠から出て、出発点にもどって行くことの必要を痛感しているのだ、とベルティは書いている。

この『アメリカ文学史』の著者に従えば、フランクリンに関する「ロレンスの注意の方向は、振子のごとく、対照的な二つのテキストの間を、価値の悲劇的な転換をもたらしながらゆれ動いている」のだ。振子の一方の点とは、数多くの信条でもって自らをかなしばりにしている「フランクリンの道学者的な古めかしい傾向」であり、他方の点とはロレンスのもつ破壊的な、反フランクリン的な傾向を指しているのだ。あのフランクリンの徳目のリストは「ロレンスの言によれば、彼によって鉄刺のついた道徳的なサクの中にとじこめられた」ものののだ。ロレンスの痛烈な、ときには皮肉を混えたフランクリン攻撃は、『古典アメリカ文学研究』を一読すれば明らかであり、この攻撃に替成するにせよ、反対するにせよ、とにかく「これが一つの概念とか視点とか以上に、フランクのリンの思想の奇妙な運命を明らかにしている」ことに注意せねばならぬとブルティは記している。「少くとも、ロレンスは成熟した、より活動的なフランクリンを特徴づけている、あまり同情的でない調子によってきたる動機を跡づけているのだ」というのである。ベルティのフランクリン論がロレンスのそれに大いに負っていることは言うまでもない。

ほぼ同様のことがベルティのメルヴィル論についても言えるであろう。このイタリア人はメルヴィルに関する項目を、いきなり「あの議論的で、一般的見解に反対する奇妙に複雑な宣伝臭の強い文章の中で、ロレンスは19世紀のアメリカ作家の想像力による征服は陸地にむかつてではなく、海にむかつてなされていると断言している」と書きはじめる。陸地は結局のところ、日常生活に釘づけされたものであり、ファンタジーの中に入りこむことはできず、人間のもつ執拗な疑問を打ちやぶり、神秘的価値を放棄するのである。こうした陸地を理想化することに、19世紀の三大作家トルストイ、ハーディ、ヴェルが努力したのだ。これはたしかに素晴らしいことではあるが、しかし、人間の血は「海」に他ならぬ。「海」は未知なる現実の真空への拡大であり、陰

うつな形而上的衝動にみちた絶望的要素をもち、孤独そのものであって、この「海」では時間が水平な鏡の平面の上になげ出されている。そこには驚くべき調和の可能性と世界の根源の大いなる変貌があるのだ、とベルティは論じている。

この無限の「海」にあってコトバは古代からの空間の中で共鳴し、力強い想像力を回復さし、ここを進む船は深海にすむ神秘的な生物の集団的な亡霊をしたがえているのだ。「海」にあって、人生の反覆に疲れた人間は「あこがれ」を見出し、海のマジックにとりつかれた野蛮人、苦悩する人間の悪夢の主人公たるハーマン・メルヴィルの姿を見出すのだ、とベルティは書いている。近代人メルヴィルは「海の中に、本質的に妥協することのない感受性と枯れることのない可能性とのドラマを発見した」のであり、「閉ざされた時代現状の中において、生命と思考との創造的な交流を確立する方法」を探りあてたのだと考えることができるのだ。こうしたベルティのなかなは熱狂的な文章が、ロレンスの所説のパラフレーズあることはほぼ推察できることである。

メルヴィルは、ロレンスがそう呼んでいるように、「最も偉大な海洋詩人」であり、彼の仕事は「伝説の材料の叙事詩的発見」であり、「具象の世界における最高の状況の発見」であったといえる。「海」という状況においては、「放浪」という要素が「生きている要素、石器時代につながる強烈なファンタジーとからみあう」のである。メルヴィルは世間的な地上の世界をのがれて、「直観的に人間的な経験と生活との極限に行きつくため、彼が彼の周辺の生活を嫌悪した」のだ。ベルティによれば、ロレンスは、陸地以外の場所に、それがいかなるものであれ、またいかなる場所であれ、とにかく一つの水平線を発見しようと狂気になっているメルヴィルの物語を考えていたのだ。「たとえば、太平洋はあらゆる大洋のうちで最も古いものと考えられ、それは他の世界の不変性や大きさと関連があり、単調な他の時代の単調な諸相とも関連がある」のであって、この大太平洋には「夢と忘却」とがあり、「この夢と忘却とは、雄大な過去の夢と忘却である」とベルティは語っている

こうしたベルティの言葉はなおも続くのであるが、これ以上は必要あるまい。このあと『白鯨』を論じるときにも、またホーソンの『緋文字』や『ブライスデイル・ロマンス』を論じるときにも、たえずD. H. ロレンスとその『古典アメリカ文学研究』は引き合いに出されているのだ。独断的にいえば、ベルティはロレンスを解説しつつ「古典アメリカ作家」を語り、ロレンスを補いつつ自己の所論を発展させるという方法をとっていると僕には思われる。いずれにしてもベルティの『アメリカ文学史』を覆う影は、僕の先入観を多少割引きするとしても、相当に深いものと言はねばなるまい。

以上、僕はきわめて粗雑であるけれども、チエツキの『にがいアメリカ』とベルテイの『アメリカ文学史』とをロレンスとの関連において考えてきた。臨床的な診断にすぎないけれども、イタリア派アメリカ文学におけるロレンスの影の深さは否定することができない、というのが僕の性急な結論であるのだ。が、そうであることを仮りに認めるとして、それはいかなる意味をもっているというのか。

この点を考えるために、僕は重ねて佐伯彰一氏の言を借用せねばならない。氏は先にあげた文章の中で、ロレンスの『古典アメリカ文学研究』がアメリカにおける学問的研究、たとえばレヴィンの『暗黒の力』とかフイーデルソンの『象徴主義とアメリカ文学』などに強く影響していることを指摘し、

これらの研究者たちがいずれもこうした〔ロレンスの〕教訓の忠実な実行者に他ならぬことは、一目瞭然だろう。ロレンスの名前がはつきりそれと名指されていない場合ですらも、彼らの「靈感」の源泉は明らかだ。学者らしい慎重さが、ロレンスの極端な言いまわしを忌避しているにすぎない。彼らの見事な学識に支えられた書物全体が、ロレンスの直観と予見に対する、綿密周到な脚注とさいええるかも知れない。

と書いていた。ましてや、「古いヴァイジョンを引きさいて、裂け目に踏みこめ」というロレンスの言葉を巻頭に掲げたライト・モリスの『かなたなる領土』については言うまでもない。

この佐伯氏の指摘が適切であることは、若い批評家フィードラーの近著『アメリカ小説の愛と死』の序文を見ることによつても明白になだろう。フィードラーは「アメリカ小説を論じたあらゆる批評家の中で、最も真実に接近したと思はれる批評家」は他ならぬロレンスであり、

彼の『古典アメリカ文学研究』は、そのテーマのもつ複雑さや危険を裏切ることなく解説し得た最初の書物だ。この小冊子の中に、ぼくは児童文学の仲間入りをさせられているアメリカ小説に対するぼくの疑念の裏付けを見出した。

と述べているのだ。すでに触れた R. チェースとロレンスの関係もまたアメリカの学会におけるロレンスの重要性を語るものに他ならぬ。更にいえば、チェースがアメリカ文化を矛盾の文化と規定して、その小説の特殊性を論じ、フィードラーがアメリカと小説ジャンルとの密接な関係を説明し、あるいは R. W. B. ルイスがアメリカ人のアダム性を追求しようとするとき、彼らが D. H. ロレンスの所謂「アメリカ大陸以外のどこにも属することのないあの異質性」を、「アメリカ人であること」の確証を捕えようとしていることはたしかであるのだ。

ロレンスはアメリカ人の思いつくことのできなかつた「視点」を提供したのであり、この彼の「視点」が現在アメリカで重要視されているばかりでなく、彼の『古典アメリカ文学研究』の出版後数年をへた30年代からイタリアにおけるアメリカ文学研究に重要な働きを果してきたという

わけである。と書いてくれば、僕の言はんとすることは明らかであるだろう。イタリアにおけるアメリカ文学研究家のいだいたアメリカのイメージは、基本的には、ロレンスのそれであり、そのイメージは同時にアメリカ人研究家のそれでもある。とすれば、チエツキ以後のイタリア派アメリカ文学研究は、意外にまともな出発点をもち、まともな発達をとげてきたといえることができるだろう。歴史の偶然なめぐり合はせというよりは、イタリア学者の先見の明に軍配をあげるべきだと僕は考える。

僕としては、ロレンスとイタリア派アメリカ文学研究という題目を不十分にしか論ずることができなかつたものの、わが国におけるアメリカ文学研究もまたロレンスにかえるべきだ、いや、少くとも、佐伯氏の言うように、「崖つぶち」まで行きつくした「ロレンスの生きた衝撃性」をとりもどすべきだと言いたい。イタリアにおけるアメリカ文学研究のあり方は、僕らに一つの方角を示すものではあるまいか。

(1960年8月27日)

〔書 誌〕

Luigi Berti, *Storia della Letteratura Americana*, Volumi I e II (Milano, 1950)

Emilio Cecchi, *America Amara* (Firenze, 1938)

Richard Chase, *The American Novel and its Tradition* (New York, 1957)

————, *The Democratic Vista* (New York, 1958)

Charles Feidelson, *Symbolism and American Literature* (Chicago, 1953)

Leslie Fiedler, "Italian Pilgrimage: The Discovery of America," *An End to Innocence* (Boston, 1948)

————, *Love and Death in the American Novel* (New York, 1960)

D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (New York, 1923)

Harry Levin, *The Power of Blackness* (New York, 1958)

R. W. B. Lewis, *The American Adam* (Chicago, 1955)

Wright Morris, *The Territory Ahead* (New York, 1957)

佐伯 彰一, 「ロレンスとアメリカ文学」, 『声』(1959年秋季号)

〔付記〕

この原稿を書いたのは丁度一年前であつたが、その直後 *The Sewanee Review* Summer 1960 がイタリア派アメリカ文学研究の特集号を出したことを知った。それに付けられた序文は簡潔にこの派の発展と現状を説いた恰好の文章であるので参照されたい。また、最近号の『英語青年究 (36年9月号「ヨーロッパ大陸における英文学研究」) と題する特集をしているのも、拙稿との関連において興味深い。本稿中のチエツキの名前は野町二氏の「イタリアにおける英文学研究」(研究社英米文学語学講座) および上記『英語青年』中の野上素一氏の文著に散見される。

(1961年8月25日)